

兄の声

小川未明

青空文庫

おかあさんは、ぼくに向かつて、よくこういわれました。

「小さいときから、おまえのほうは、気が強かつたけれど、にいさんはおとなしかつた。まだおまえが、やつとあるける時分のこと、ものさしで、にいさんの頭をたたいたので、わたしがしかると、いいよ、武ちゃんは、小さいのだからといって、にいさんは、おこりはしなかつた。ほんとうに、がまん強い子でした。」

ぼくは、そうきくと、物心のつかない幼時のことだけれど、なんとなく、いじらしい兄のすがたが目に浮かんで、悲しくなるのです。

兄が召集されてから、後のことでした。

えんがわに、兄のはいていたくつがかわかつてありました。まだ落とし残されたところがついています。朝晩、兄は、このくつをはいて、通勤もすれば、また会社の用事で、方々をあるきまわったのでした。ときどきは、映画館の前にも立てば、喫茶店へも立ちよつたであります。なにしろ、かけがえのくつを持たなかつたから、かかとはへるにまかせて、いたんでいました。もつとも、一度、街頭で朝鮮人のくつなおしに裏皮をとりかえさせて、月給のほとんど全部を払わせられたことがあります。考え

れば、このくつには、兄あにのふんできた生活せいかつの汗あせがにじんでいるのでした。形かたちがいびつとなつて、ところどころ穴あながあいているのも、心こころなしにながめることは、できません。

兄あにのところへ、友ともだちが、たずねてくると、しぜんと生活せいかつの感想かんそうや、世間せけんの様相ようそうが話はなしにのぼりました。兄あにのこれらの意見いけんも、このくつをはいて、あるくうちに得えられた体験たいけんでありましょう。

兄あには、こつういのでした。

正直しょうじきで、しんせつで、謙遜けんそんな人ひとというものは、たとえ、はじめてあつた人ひとでも、

もうこれまでにいくたびもあつたことがあるような、なつかしきをおぼえるものだ。

「あなたとはいつかどこかでお目めにかかったことがありませんね。」と、ききたくなることがある。そんなときは、しいて自制じせいしながら、

「なんで、そんなことがあるものか。きちがいでないかぎり、だしぬけに聞きかれるものではない。」と、自分じぶんをしかるのだ。

また、こんなおかしなことを空想くうそうすることもある。

「もしかすると、前世ぜんせいにおいて、出であつた人ひとかもしれないぞ。」と。

「いや、まったく、ばかげきつた話はなしですが、世よの中に善ぜん良りょうな人間にんげんほど、相手あいてを感かんげ

激きさせるものは、ありません。」と、兄あには、いうのでした。すると、兄あにの友ともだちは、「そうですか。そういういい人ひとと、どこで、おあいなされましたか。」と、かならず問とうのであります。

兄あには、友ともだちに、

「わたしは、社しゃ用ようで、方ほう々ぼうの会かい社しゃや、工こう場じょうを訪ほう問もんします。そして、いく人にんとなく情じょう味みのゆたかな人ひとたちと出であいました。ところがふしぎに、それが門もん番ばんとか、受う付つけとか、地ち位いの低ひくい人ひと々びとにかぎっていました。さもなければ、大たい衆しゅう食しょく堂どうの前まえへならぶような人ひと々びとであります。それらの人ひとたちとは、顔かおを見みたさいしよから、なんでも心こころのうちを、うちあける気き持もちになれば、また一本ほんのたばこを分わけあつたこともめずらしくありません。なにがそうさせるのか、とにかく、この苦く痛つうの多おほい世よの中なかで、こうした人ひと々びとの存ぞん在ざいは、どんなになぐさめとなることでしょう。わたしは、会かい社しゃの内うちにいますきより、外そとを出であるくときのほうが愉快ゆかいなものも、そのためです。」と、語かたるのでした。

「じゃ、社しゃ内ないの空くう気きが、おもしろくないのですか。」と、友ともだちは、きくのであります。「考かんえてごらんさない。命めい令れいと服ふく従じゆうしかなないとところに、いつたい、なごやかさなどというものがありませんか。」と、兄あには、答こたえました。

兄は、おだやかな性質であつたけれど、だれに対しても、正直に思つたことを話しました。ことに友人に対しては、すこしもかくしだてすることはなかつたのです。兄は、会社で、上のものが権力によつて、下のものをおさえつけようとするのを見て、なにより不愉快に思つたらしいのでした。

「課長は、いつも、こわばつた顔をしているが、家へかえつて、細君や、子どもたちにも、あんな目つきで、ものをいうのだろうか。」と、さもまじめに、考えていたこともあります。

また同僚が、むやみと上役に対して、機嫌をうかがうのを軽蔑しながら、「公用と私用を一つにするばかもあるものだ。自分からこのんで、奴隷になろうとしている。」と、歎息していたこともありました。

よく重役が、買い出しや、家事の雑役などに、社員を使用することがあります。が、兄は、けつしていかなかつたばかりでなく、そんなひまがあるときは、映画を見たり、レコードをきいたりしたものでした。

あるとき、ぼくが、

「にいさんは、いつも音楽をきいたあとで、どんな空想をなさいますか。」と、きい

たことがある。ふだんから、美と平和を愛する兄であるのを知っていたけれど、こうした場合に、希望や、空想が、どんな形であらわされるだろうかと思つたからです。

兄は、遠くを見るような目つきをして、

「そうだな、いい音楽をきいたときだね。」といつて、考えました。

「美しい、絵のようなけしきが、目に浮かんでくるよ。」

「どんなけしき？ 現実でなく、架空な、未来の世界とでもいうのですか。」

「いや、そんな空虚な夢ではない。たとえば、赤い夕空の下に、工場の煙突がたくさんたつている、近代的な街の風景とか、だいたい色の太陽が燃える丘に、光線の波うつ果樹園とか、さもなければ、はてしない紺碧の海をいく、日章旗のひるがえる商船とか、そんなような、清らかで、朗らかなうちにもさびしい、けしきが目に浮かぶのだよ。」と兄は、いつたのでした。ぼくは、

「にいさん、そうした美しさなら、いくらかもあるけしきじゃありませんか。」と、いつたのです。

兄は、じつとぼくを見て、

「ただわたしがそういつただけでは、わからないだろう。なるほど外観からいえば、こ

の種の街や、工場や、農園は、絵として見ても、手近なものであるにちがいない。問題は、その町や、村で働いている人たちのことだ。わたしが、これまでであった、あのような、謙虚で、正直で、しんせつな人々が働いているということではなからぬ。かりにそうしたどうしの集まりだと想像してごらん。日々そこでいとなまれる生活こそ、どんなにか、楽しかろうじやないか。そこには、暴力や、権力をもつ人間もなく、すべてが理解と同情とで、協力しあうのだからね。」といいました。

そうきくと、たとえ、経験のとぼしいぼくでも、そして、また深いことはわからぬけれど、そうした社会が平和で、真に住みよいところであるということだけは、さとれるのでした。

兄がいなくなつてから、家の中は、急にさびしくなりました。そして、はやいく日か、たつたころ、母はひとりごとのように、

「ゆうべ、あの子が特攻隊へはいった夢をみたが。」と行って、ふさいでおられました。だから、ぼくは、

「にいさんにかぎって、特攻隊などへ、入りませんよ。」と、うち消して、無理にも母を元気づけようと思いました。しかし、母は、いつまでも気にかかるのみえて、それから後も、家の中は、なんとなく、うすぐらいような日がつづきました。

ところが、まったく突然でした。それが、おどろきでもあり、喜びでもあったのは、兄が帰ってきたことです。

ある日、だれか玄関へきたようなけはいがしたので、姉が出てみると、立っていたのが兵隊すがたの兄だったので、姉は、びっくりして、

「まあ、義ちゃんなの？ お母さん、義ちゃんが帰ってきましたよ……。」と、さげんだ。その声をきいて、母も、ぼくも、ころげるようにとびだしました。兄は、泣いているのです。

「さあ、早くお上がり、どうしたの。」と、母も泣きました。

「にいさん、なにか変わったことがあったの？」

ぼくは、いままで兄の泣いたのを見たことがなかったのと、もし出征すれば、おそらくふたたび見られないだろうと思っていたので、ついこうききました。姉も、

「義ちゃん、どうかしたの？」と、兄の顔をのぞくようにしました。

兄は、あとから、あとから、目にあふれ出る涙を、手の甲でふきながら、頭を左右にふつて、

「みんなの顔が見られて、うれしいのだ。」と、わずかに答えたのです。

「こつちへ、あがつてから、ゆつくりお話しなさい。」と、母は、手を引かんにばかりにして、兄がくつのひもとくのも、もどかしげに見守っていました。

「にいさん、もういかなくてもいいの。」

「いまなん時だね。晩方までに、こちらを出て、隊へかえらなければならぬ。」

兄は、あいさつが終わると、これまで、自分が勉強をしたり、レコードをかけたしたり、へやへいきました。家のものは、その後も、兄がいるときと同じように、そうじはするけれど、だれも、手をつけようとしなかったもので、本箱のなかも、たなのかざりも、兄が出ていったときのままとなっていて、すこしも変わっていませんでした。

兄は、さもなつかしそうに、あたりを、見まわしていました。それから、いつもそうしたように、好きなレコードをかけました。

外国物では、アベリマリアとか、粗朴ながら、血のつながりに、哀愁をもよおす日本の俚謡などを兄は、このみました。

「義ちゃんが、ずっとこうして、家いえにいてくれたらいいのにね。」と、姉あねはそばに立ち、鼻はなをつまらせていました。

「じきにかえつてきますよ。そうしたら、もうどこへもいきません。」と、兄あには、答こたえました。

「お母かあさんが、心しんぱい配はいしていらつしやるから、きつと無ぶ事じに帰かえつてね。」

晩ばん方が近ちかく、小こ雨さめの降ふるなかを、兄あには、隊たいへとかえりました。みんなが、門かどぐち口ぐちまで見み送おくりに出でると、ふりかえつて拳きよしゅ手ての礼れいをのこ残こして去さりました。

「あんまり思おもいがけなかつたので幽ゆうれい霊れいかと思おもつたわ。」と、姉あねはへやへもどると、母ははに話はなしていました。

「公こう用ようのついでとかいいいますが、よく寄よつてくれましたね。」と、母ははは、目めをしばたいていました。

しかし、それきり、兄あには家いえへ帰かえらなかつたのです。やはり特とつこうたい攻こう隊たいに入はいつていたのでした。あとで、このことも知しつたのですが、兄あにはあのととき、いとまごいのつもりできて、わたしたちに気きづかれぬように、アルバムから、父ちちと母ははの写しゃ真しんをはい持もつていきました。戦争せんそうちゆう中ちゆう、特とつこうたい攻こう隊たいが、よく出しゅつ発ぱつ前まえ、別わかれのことばを放ほう送そうして故ここく国こくにのこした

ことがあります。が、地域の関係からか、兄はこれに加わらなかつたのです。しかしながら、ぼくは、現在でも、道のあるいてるときとか、またぼんやり空想にふけているときとか、そんなようなときに、どこからともなく、兄の声をきくことがあります。

ことにさんらんとして夕焼けのする晩方などに、あぎやかといつてもいいくらい、はつきりと、なつかしい兄の声をきくことがあります。

「おまえは、真に自由と、正義と、平和のために、生命のかぎりをつくせ！」と。

それは、短い生涯であつたけれど、美と平和をこのうえなく愛した兄として、こういって、ぼくをばげましてくるのは、まことに、当然のことと思われるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「子供の広場」

1946（昭和21）年4月

※表題は底本では、「兄《あに》の声《こえ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

兄の声

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>